

M・バンクス著

『エスニシティ
——人類学的諸構想——』Marcus Banks, *Ethnicity : Anthoropological
Constructions*. London : Routledge, 1996, viii +
210 pp.

原 口 武 彦

はじめに

私は本書の刊行とほぼ時を同じくして本年3月、現代アフリカの「部族と国家」^(註1)について考察した一書を上梓した。その中で、アフリカでこれまで部族 (tribe) と呼ばれてきた集団をエスニック・グループ (ethnic group) という語で呼びかえようとする動きの意味について検討した結果、この呼びかえはアフリカの現実の理解にとっては有効ではないばかりか、ある意味では妨げになるという結論に達した。ethnic group, そしてその輸入カタカナ日本語である「エスニック・グループ」はアフリカ研究にとっては明らかに外来語である。しかし、それだけでアフリカ研究へのこの語の導入を拒否する理由にはならない。ethnic group という語が、英語圏でどのような地域のどのような人々に対するどのような人々の研究関心にもとづいて登場し、英語圏アカデミズムの中で市民権を獲得するに至ったのか。本書はそのような疑問に答えて、英語圏におけるいわゆるエスニシティ研究についての包括的見取り図を提出している。そしてそれは、上記の私の判断を補強してくれるものであった。

書名を和訳する際、副題の 'constructions' について「構築物」、「仮想」などの訳語も考えたが、とくに後者は著者の意図を読み込みすぎているように思え、「構想」と訳した。

また本書は、エスニシティ研究の代表的諸文献を検討しているが、その際の接近方法は、私が自著の中で舌足らずながら指摘し、分析を試みた問題領域について自覚的であった。後述するように、それは英語という国際的な大言語文化圏に生まれ育った人間には気づくことが難しい問題領域であろうと私は一人勝手に思い込んでいただけに、この発見は新鮮な驚きであった。

以下、本書の内容をアフリカの部族にこだわる一日本人アフリカ研究者の立場から検討し、評価を試みる。

なお、本書の著者、M・バンクス (Marcus Banks) は、現在、オックスフォード大学の専任講師を務める社会人類学者である。1970年代に大学院生活を送り、87年にはじめてオックスフォード大学の教壇に立ったとあるから、おそらく現在40歳代の働き盛りの研究者であろう。彼の博士論文の対象は、英国に移住してきたインドのグジャラト地方出身者の集団であった。

I 本書の構成

本書は以下の7つの章からなる。

- 第1章 序論——種々の基本的立場と一思想の寿命——
- 第2章 発掘されたエスニシティ
- 第3章 アメリカにおけるエスニシティと人種
- 第4章 英国におけるエスニシティと人種
- 第5章 エスニシティとナショナリズム
- 第6章 解き放たれたエスニシティ
- 第7章 結論

文献リスト・索引

上記の各章の標題からもうかがい知ることができると、本書がエスニシティ研究として視野に取り入れているものは方法的にも地域的にも多岐にわたっている。

方法的には著者の専門である人類学に加えて社会学、政治学など、さらに第6章ではアカデミズムとは峻別されたジャーナリズムまでが取り込まれて検討されている。また地域的には、英米両国をはじめ、

フランスなどヨーロッパ諸国、旧ソ連邦、旧ユーゴのボスニア、パキスタン、中・南部アフリカなどにおいて発生した事態に関する諸研究文献が検討されている。

巻末に付された文献の数は250件をこえ、しかもそれらはすべて英語文献である。英語圏におけるエスニシティ研究の質量の豊かさに、改めて驚嘆させられる。

II 内容の紹介

「全く突然に、しかるべき説明も儀式的手続きもほとんどなく、エスニシティは普遍的存在となった。過去数年の著作や論文の標題を一瞥しただけで、『エスニシティ』と『エスニック』という術語が使用され受容されることが着実にかつ加速的に増大しつつあることがわかる。それらは、かつては『文化』、『文化的』、『部族的』という術語で包摂されてきたものに言及するのに使用されるようになったのである」(1ページ)。

R・コーエン(Ronald Cohen)が1978年に発表した論文^(注2)の上記の一節の引用からはじまる第1章は、まずF・バース(Frederic Birth)、N・グレイザー(Nathan Glazer)とD・P・モイニハン(Daniel P. Moynihan)など10人の代表的研究者たちのエスニシティに関する「基本的立場」を示す言説を引用紹介したのち、「境界、他者性、目標と達成、存在とアイデンティティ、出自と分類などについてのやや単純化した明白な言明のひとつの集合であり、それはその主体によってと同じくらいに人類学者によっても構想(construct)されてきたのである」(5ページ)として、エスニシティの仮構性を強く意識する本書の「基本的立場」を示している。

第2章は、「境界と内実——ノルウェーからの見解——」、「ソ連のエトノス理論」、「『部族主義』とエスニシティ——マンチェスター学派——」、「その他の声」の4節から構成され、各節の見出しが示しているように、ノルウェー人のバース、旧ソ連のY・ブロムレイ(Yulian Bromley)らのエトノス理論、M・グラックマン(Max Gluckman)を領袖とする

英国のマンチェスター学派が主に中・南部アフリカで行なった人類学的調査の成果などが紹介され、検討されている。

バースの理論的主張は、彼が1950年代中葉に西パキスタンからアフガニスタンにかけての辺境に居住するパザン(Pathan)人について行なった調査の成果にもとづいている。著者バンクスによれば、エスニシティ研究におけるバースの最大の貢献は、「エスニックな目印である衣服、食物、言語などの考察を通じてエスニック・アイデンティティの内実を論議することから転じて、その内実の限界を画する境界に目を向けさせたこと」(13ページ)であり、「バースは『部族』という本質的に植民地主義的なパラダイムと訣別して、『部族的』アイデンティティに新しい光をあてて接近する道を切り拓いた」(17ページ)と評価する。

「革命後、エスニックなあるいは文化的な差異は、合理的な社会主義計画を前にしてしほみ、『ソヴィエトという超エスニシティ』にとってかわられると想定されていた」、そして「スターリン体制のもとでは、この主題に関する論議が禁じられていた」(22ページ)ソ連で、徹底したロシア化計画などにもかかわらず少数民族がその個性を維持しつづけた状況を反映して、1970年代以降、プロムレイ(ソヴィエト科学アカデミー民族学研究所長)らはソ連の民族学をエスニシティ研究の方向に転換させたという。

「彼らは、エスニック・アイデンティティの原初的な核の存在を主張しながらも、エスニック・アイデンティティの表現をかたちづくるのに、特殊な歴史的、経済的、……政治的な要因の重要性を認識するひとつのエスニシティ理論をわれわれに提供している」(24ページ)とバンクスは評価する。

次には、英国の人類学にとっては重要な地位を占めているアフリカ研究が取り上げられる。アフリカの諸部族の伝統的社会組織に対するエヴァンス=プリチャード(Evans=Prichard)らに代表される古典的関心から一転して、「都市化と植民地主義がもたらした変化」に関心を向けるようになったマンチェスター学派に焦点があてられている。著者が直接取り上げているのは、南アフリカのズールーランドに

においてズルー人の白人植民者に対する対立を分析したグラックマン、カッパーベルト地帯での「カレラ・ダンス」^(註3)を分析したJ・C・ミッチェル(J. Clyde Mitchell)、南アの都市イースト・ロンドンに移入してきたコーサ人を分析したP・メイヤー(Phillip Mayer)、西アフリカのナイジェリア南部の都市イバダで活動するハウサ人商人グループを分析したA・コーエン(Abner Cohen)、などである。

以上からみてもわかるとおり、バンクスは植民地化以降に発生したアフリカの都市的状況におけるアフリカ人の部族間関係、アイデンティティへの関心が、方法的にエスニシティ研究に包摂される研究動向と見なしている。

第2章が、「数世紀にわたって同一の地域や民族国家に居住してきた非西欧人に対する観察から収集した資料にもとづく『エスニシティ論』(49ページ)の検討であったのに対し、つづく第3章、第4章は「……欧米の研究者の母国(具体的にはアメリカとイギリス——引用者注)に移入してきた非西欧人やその他の人々に対する観察から収集した資料にもとづいてそれぞれのエスニシティ論を展開している欧米人研究者の文献」(49ページ)が取り上げられる。2つの章の標題にも示されているように、この2つの章での焦点は英米両国におけるエスニシティ(論)と人種(race)(論)との関連である。

第3章はW・L・ワーナー(W. Lloyd Warner)がL・スロール(Leo Srole)との共著で1945年に出版した『アメリカの諸エスニック・グループの社会システム』^(註4)が取り上げられ、そこではマサチューセッツ州のヤンキー・シティに居住するアイルランド人、フランス系カナダ人、ユダヤ人、イタリア人、アルメニア人、ロシア人の8つの集団が対象化されているが、そもそもこの町の名の由来である「ヤンキー」と黒人は分析の対象から「ほとんど完全にはずされている」(68ページ)。そして1963年に『るつぼを越えて』^(註5)を共著で出版したグレイザーとモイニハンになると、「ニグロは、アメリカ人であり、アメリカ独自の産物なのである。ニグロは、とりまく環境から守る必要があると感じる(異)文化や価値を有していない」(73ページ)ということ

になる。

このように「アメリカ人著述家の多くは人種的マイノリティとエスニックなマイノリティを区別している。前者は黒人、アジア人、その他の非白人であり、後者はヨーロッパ系の集団である」(53ページ)というW・ピーターセン(W. Petersen)の指摘が引用されている。

この「人種」と「エスニシティ」は、英国ではどのような関係になるのだろうか。第4章はこの問題をアメリカとの比較で検討している。

「英国は、アメリカのように移入民と植民者から構成されていると自らを認知したことはなかった」ので、「『ニグロ問題』も『るつぼ問題』も存在しなかった」(88ページ)。そして第2次世界大戦中から戦後にかけて、ポーランドをはじめ中央・東ヨーロッパから多くの人々が移住してきて、すでに古くから居住していたアイルランド人やイタリア人に加わったが、彼らの存在はあまり研究者の注目をひかなかったという。そして「英国におけるマイノリティ・グループについての著作のほとんどは、黒人と『アジア人』に関するものである。この場合の黒人とは、カリブ海のかつての植民地にその出自を辿ることのできる人々と、最近ではアフリカ、とくにナイジェリアから直接やってきた移入民である。……アジア人とは南アジア、主にインド、パキスタン、バングラデシュの出身者で、アメリカの場合のように、中国人、日本人、韓国人は含まれていない」(89ページ)という。

そして「英国在住の黒人は、英語を話しキリスト教徒であり、『(異)文化』をもっているとは認識されていない。アジア人は言語、宗教、衣服、食習慣など異邦の『文化』を有している」(98ページ)ことから、英国の人類学的研究はいきおいアジア人に関心が集中してきたという。

第5章では、ナショナリズム(論)との関連でエスニシティ(論)が論じられている。バンクスはエスニシティとナショナリズムの違いを次のように巧みに説明している。

「もしあなたが白人であるならば、……これまでの2つの章で論じてきた人種やエスニシティの問題

は、個人的にはあなたに関係ないものとして読みすすんできたということは十分ありうることだ。白人南アフリカ人とごくわずかな例外的白人だけが、『白人種』であることを意識し、……『エスニック・マイノリティ』だけがエスニシティを意識する。もちろん人種やエスニシティに意味があるとすれば、それらが示す境界の両側において意味をもつはずであり、それにかかわっていないという幻想はまさに幻想にすぎない。しかしナショナリズムについては少々事情が異なる。表面上、現代世界における国境に裏側、すなわち非ナショナリズムの条件は存在しないからである。……それは、われわれの時代の支配的な社会・政治的条件なのである」(124~125ページ)。そしてこの章を構成する4つの節の最終節に付された「多数派はエスニシティを有するか？」という見出しは、著者バンクスのナショナリズムとの関連でのエスニシティ観を集約的に表現している。

第5章までの各章で検討の対象とされてきたのはすべて学術文献であったのに対し、第6章ではそのようなアカデミズムの枠から「解き放たれ」、新聞、テレビ、ラジオなどジャーナリズムに登場するエスニシティが取り上げられる。具体的には、アフリカのルワンダ内戦、旧ユーゴスラビアのボスニア紛争、さらには1987年、英国で大きな社会問題となり論議をよんだ26人の白人子弟の越境入学事件（パキスタン系のイスラム教徒の子弟が大半を占める最寄りの小学校に自分の子弟を入学させることを忌避した白人の親たちが越境入学させようと試みて当初、当局に拒否されたことに端を発した事件）などの報道、議論に登場したエスニシティである。

白人児童の越境入学問題にかかわる議論を紹介、検討する中で「イングランド人(English)というエスニック・アイデンティティは、『英国人(British)』という民族的アイデンティティの主要な構成要素であるゆえに致命的に無印」であり、「『アジア文化』に対抗し、『英国文化(British Culture)』を擁護することには本来の矛盾が存在する」(177ページ)とバンクスは鋭く指摘している。

最後に「結論」としてバンクスは、冒頭に利用した「基本的立場」を敷衍して次のように述べている。

「人種、エスニシティ、ナショナリズムについての自分自身の理解を、他者からその理解を引き出したかのように印象づけて、他者に投影(project on)することは大きな誤りであり、それはせいぜいのところ混乱を、悪くすると暴力や流血を導くことになる」(186ページ)。

「……エスニシティ研究の持続は、おそらくそれに値することであろうが、しかしそれに値するのは、エスニシティを研究するということが自体がエスニシティを引き続き存在させることになるということとその接近方法が認めるかぎりにおいてである」(189ページ)。

III 評価

以上、本書の内容を要約的にというよりも、私の関心にひきよせてつまみ食いの紹介した。そうせざるをえなかった一因は本書の性格にもある。著者のバンクス自身が表明しているように、本書の目的は「……エスニシティについての目をみはるような根源的なひとつの新解釈を提示することではなく、すでになされてきた重要な研究を要約し、結びつけること」(1ページ)にあり、したがって本書全体が書評論文的な性格を有しているためである。

しかし本書を通読してまず感じるのは、著者がエスニシティ関連の諸文献に対峙する際、その基本的視角は終始一貫している点である。著者は常に、その作品がどのようなエスニシティ的背景をもつ研究者によって、その研究者とどのような関係にある人々を対象に行なった観察に基づいて構築されたエスニシティ論であるのかを注視している。とくに研究者のエスニシティ的背景に目を向けている点が新鮮である。「はじめに」で英語圏の研究者にこのような問題意識が成立するとは予想しなかったと述べたのはこの点である。バンクスは研究主体が英国人かアメリカ人か、そして彼らが対象化している人々の集団が自国内の居住者か植民地ないしは国外の居住者かという点を強く意識して、それぞれのエスニシティ論の性格づけ、位置づけの有力な武器としている。

しかし、バンクスの視野は主に英語文化圏にかぎ

られているため（それはある意味で当然かもしれないが）、ひとつのエスニシティ論がひとつの言語で書かれざるをえないことから、必然的にその理論が含み持たざるをえない（バンクスのような用語法にしたがえば）エスニシティが存在することにまでは思い至っていない。

その関連でいえば、バンクスの論述の中に登場する ethnic group, ethnicity, tribe, tribalism, nation, nationalism, race, racism, など諸術語の相互関連は一義的に決定されておらず、日本語文化圏に生まれ育った私には難解であった。バンクスにおけるこれらの術語はひとつひとつが自立していて、相互の位置関係は、よくいえばダイナミックに変動する。それにひきかえ日本語の場合には、部族、民族、人種などの述語は、言語的にあらかじめ序列的に位置づけられているように思われる。

そのことが日本語圏では、私が自著で提示したように、「部族の呼びかえ」といったような問題設定を可能にするのであろう。バンクスにあっては、tribe と ethnic group の差異は、研究者の価値観ではなく、もっぱらどのような視角から対象を観察しているかという研究者の対象に対する接近方法の差異として捉えられている。tribe という語が日常用語として含みもっているとされる侮蔑的ニュアンスは、少なくともアカデミズムの枠内では問題視されていない。

アフリカの現状についてバンクスは「(脱)植民地化後のアフリカ諸国における過去、現在の紛争の多くは、ひとつの『エスニック・グループ』が、国家機構を支配しようとするばかりではなく、もし成功するならばそのグループの規範、価値を『国民的(national)』規範、価値としておしつけようとする試みを表わしていると主張しうるのであろう」(157ページ)と述べている。

これに対して私は、アフリカの諸部族にはそのような企図を生み、またそれを成功させる現実的可能性は存在せず、それ故に国家権力との関係において部族の地位にとどまっていることが、アフリカに固有な状況なのであると理解している。そこには、アフリカの部族を ethnic group と呼びかえることを

許さない特殊アフリカの状況が存在していると私は考えるのである。

本書のキーワードである ethnicity について、私はこれに日本語の訳語をあてず、この書評をエスニシティというカタカナ英語で通してきた。バンクスのエスニシティは、私が自著で方法的概念として提示した「族」に近いものである。しかし両者は以下の2点で異なっている。

まず第1に、ethnicity は、語彙的に他者性、地域性が濃厚な ethnic group という語からの抽象であり、ethnic group, tribe, nation, race などに対して中立的にこれらを包括する概念になりえない。そして、私が自著で展開したように、部族、民族、人種（さらにはここにエスニック・グループを加えてよい）などが、近代世界で成立した「族」的集団の歴史的形態であるというような言説において、エスニシティは「族」に代置しうる位置にないように思われる。

その第2は、バンクスは ethnicity に独自の規定を与えていないが、彼が「原初主義 (primordialist)」に対して「用具主義 (instrumentalist)」に傾斜していることは、彼の人種、人種主義の扱いを見ても明らかである。そしてエスニシティの構成要素として出自、血縁を重視するエスニシティ論は原初主義として退けられている。その点で私が提示した「族」概念は、まぎれもなく「原初主義」の系譜に分類されうる。しかし、血縁という要素は一見、原初的であるが、原理的に考えて集団の構成要素としては、強い連帯のきずなとなるとともに、原基的な母子関係に至るまではてしなく分裂する契機ともなる要素であり、その意味できわめて不安定な要素であると私は考えている。バンクスに対する批判としていえば、血縁を原初主義的要素とするバンクスの血縁観には検討の余地がある。

おわりに

バンクスは本書の「序」で、自分が子供の頃ロンドンのイースト・エンドで学校教師を務めていた姉メリルが語ってくれた彼女の経験談から本書の内容

にかかわる多くの示唆を与えられ、そしてそのメリルの娘テサ・ジェーンが「頑迷に敵意をもつことがより少なくなった世界」に生きられるように期待して本書を上梓したと記している。著者バンクスの個人的経験の具体的内容は知るよしもないが、彼がエスニシティ問題を自分自身にとって切実な現実問題として検討していることをうかがわせる一節で印象深い。

(注1) 原口武彦著『部族と国家——その意味とコートジボワールの現実——』研究双書457 アジア経済研究所 1996年。

(注2) Ronald Cohen, "Ethnicity: Problem and Focus in Anthropology," *Annual Review of Anth-*

ropology, 1978.

(注3) J. Clyde Mitchell, *The Kalela Dance: Aspects of Social Relationships among Urban Africans in Northern Rhodesia* (Manchester: Manchester Univ. Press for the Rhodes-Livingstone Institute, 1956).

(注4) W. Lloyd Warner and Leo Srole, *The Social Systems of American Ethnic Groups* (New Haven: Yale Univ. Press, 1945).

(注5) Nathan Glazer and Daniel P. Moynihan, *Beyond the Melting Pot: the Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians and Irish of New York City* (1963; reprinted ed., Cambridge, Mass.: MIT Press, 1970).

(新潟国際情報大学情報文化学部教授)